
ベッド下の別人

津那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベッド下の別人

【Nコード】

N2506B

【作者名】

津那

【あらすじ】

中学生の男の子が主人公の、超短編一人称ホラー。ちょっとサボリたかったばかりに、神様に挑むように祈ったつもりが・・・

塾に行くのが嫌で、ゲームをしたい時。もう一人の俺がいて、そいつが、嫌なこと全部やってくれないかなあ、なんて、考えたことないかい？

俺のベッドの下に、そいつはいた。

正月に親戚やお父さんの会社の人たちから、ごっそりお年玉をもらった。欲しかったゲームを買っても、まだ、余ったけど、俺は、母親の言う通り、それは貯金に回した。

新作のゲームソフト二枚は、期待を裏切らず、目茶苦茶面白くて嵌った。正月明けから始まる塾の冬季講習なんてのに行く気が全くなかったから、正月に拝んだ神社に行つて、神にこう言つたんだ。「本当に、神がいるなら、もう一人の俺を出して見る。」

朝、ガサガサとベッドの下で音がして、そいつは、上のマットをドカドカと、蹴っ飛ばした。俺は流石に驚いて、飛び起きた。覗いたベッドの下には、俺がいた。髪の毛の寝癖まで同じ。

「いつまで、寝てるつもりだ？塾に行く、時間じゃねーのかよ？」
ベッド下の俺は、俺の声で言う。

「じゃあ、お前が行けよ。俺は、もう少し、寝たいんだ。」

「ふーん。」

そいつは、俺を見上げて、ニヤリと笑った。のそりと、ベッド下から這い出して、部屋を出て行つた。俺は、また目を瞑つた。昨夜遅くまでゲームに嵌っていたから、すぐに爆睡状態に入った。気付いたら、十時を超えていた。母親は仕事に出ている時間。俺は、自分の分の朝食を探したが、当然ない。そうか、俺が食つて行つたんだ。仕方がないから、台所を漁つて、適当に食べた。また、ゲームを始めた。昼に腹が減ったから、とっておいたポテチを食べる。ゲームに、嵌る。

そいつは、ちゃんと塾に行つて帰つて来た。俺は、流石に腹が減

ったから、そいつに、

「代われ。」

と、言った。そいつは、しぶしぶ、ベッド下に潜り込んだ。俺が、俺の言うことを聞くのは、当然だよな。そうだろ？

俺は冬休みの間、そのテで通した。

学校が始まって、しばらく楽しかった。今度は、山本がお年玉でゲットしたゲームを借りて、塾も、学校も面倒になった。当然、そいつを使った。

そうやって、いくつ、ゲームをクリアしたっけ。三学期が終わる頃には、自分でも天才じゃないかと思うくらい、ゲームの達人になった。おまけに、別人の俺は、学校でも評判がいいらしい。しばらく塾にも行っていないけど、母親がえらく喜んでいた。ふうん、けっこうやるじゃん。俺。

春休みも、そのテで行こうとした。ゲームは絶好調だし、俺よりも、そいつの方が、世渡りは上手そうだし。俺は、おいしいとこだけをとればいいから、こんな甘い話はない。相手は、俺なんだから、遠慮はいるもんか。

もうすぐ、中二になろうとしていた。春休み、俺宛に手紙が届いた。なんと、相手は、ずっと気になっていた、前原優花。俺宛の手紙には、俺の知らないことが書いてあった。

…塾で分らない所を教えてくれてありがとう。この前の、あの約束、私は忘れない。二年生になって、別のクラスになっても、また、会いましょうね…

何だよ。これは？前原優花は目茶苦茶成績のいい奴じゃなかったっけ？優花に、俺が、塾で教えた？嘘だろう？

そうだ。俺には、あいつの記憶はない。俺が知らぬ間に、どんどん変わっていったんじゃないか。だが、俺は何も知らない。

あいつが帰って来て、俺が開けた手紙を読んだ。クックククつと、喉の奥で笑っている。

「おい、優花と、どういうことになってんだよ？教えろよ。」

俺が、言つと、あいつは、眉を片方だけ吊り上げて言った。

「あ？そーだなー。付き合ってたんだよ。」

「はあ？」

俺の知らないところでか？俺が、優花と付き合っている？おいし
いとこ、持って行かれてるじゃねーか。

「代われよ。もういい。お前、ベッド下に戻れよ。」

「あ？何言ってるの？ベッド下に行くのは、お前だろ？」

そいつは、俺の部屋にある鏡を指差した。俺は覗き込み、悲鳴を
上げて、もっとよく見ようと、洗面台に走った。じよ、冗談じゃね
え。俺の身体は湯気みたいに透き通っていた。

「な？これでわかったろ？俺が、代われと言つまで、お前がベッ
ド下に行け。」

すつと、俺は消えた。

さてと、俺の昔話は、これでおしまい。人生、今のトコ順調だか
ら、ベッド下の別人に交代しなくても、良さそうだ。

了

（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

いきなり現れたもう一人の”俺”が幻なのか、実は、現実から離れてスキ放題にしている”俺”が幻だったのか……。まるで人が変わったようだ……。って言われている人、あなたの周りにもいませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2506b/>

ベッド下の別人

2010年10月20日18時54分発行